
らぶらぶ！魔導学校へようこそっ！？

政宗芳司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らぶらぶー魔導学校へようこそ！？

【ZPDF】

N1174F

【作者名】

政宗芳司

【あらすじ】

とある魔法学校で巻き起りる、愛と青春とおとぼけの恋愛コメディ
イー！

序幕　“さあさあーーこれから始まりん青春の日々ー！”

序幕　“さあさあーーこれから始まりん青春の日々ー！”

空高く舞い上がり

風よ煌いて吹け

爽やかな青春と

活氣溢れる若わどで

“ここでも遠く飛んでぬけ

バタバタバタ・・・・・・・

廊下から、騒がしい足音が聞こえる。
それは、だんだんと職員室へ
近づいて行つて・・・・・

バタ　ンツツ・・・・・

「ぜ、はつ、す、すみません！・・・・」

「遅いですよ、墨沢先生。5分遅刻です。」

「すみません、本当に・・・・」

「またトラブル起こしたんですか。」

「うつ・・・・・。」

墨沢　泰介、24歳。

化学、生物を教える、この魔導学校の新米教師である。

この学校に来て1年。

未だに遅刻癖・・・といつより、

トラブルメーカー癖は治つていなによつだ。

「で？ 今朝はどうした。 泰。」

「あ、暁先生・・・。」

涙目で訴えてくる泰介を、
まるで弟でも茶化すよつ、
暁ははなしかける。

「け、今朝は・・・その・・・ぐ、車とぶつかりそうになつて・・・

「ばつかだなあ、お前。いつもボーッとしてるからだよ。」「つづつ、ぼ、僕だつて気をつけてるんですよ！・・・でも・・・」「まあまあ、暁先生。彼だつて、一生懸命なんですから。」「甘いですよ、柳真先生。あんまり甘やかすと、為にならない。」「つづく。」

涙目になつてしまつ泰介の頭に、

柳真は手を乗せてぽんぽんと撫でる。

「な、柳真先生いい・・・。」

「そんなに泣かなくてもいいじゃないか、墨沢先生。」

「うううう～～だつて、だつて暁先生があああ～～！」

これは、本当にいつもの光景。
朝からの・・・いつもの、光景。

それを、見ている人がいた。

それを、見ている人がいた。

「なるほど、ねえ・・・。」

その日は、特に何か特別な用事もなくて、授業も、休み時間も、普通に過ごした。何の変哲もない、日常。

「お疲れ、泰。」

「！暁先生。お疲れ様です。」

ほいっと缶コーヒーを渡して、

暁は泰介の座る、スチール製の洒落たベンチの横に座る。

「お前、もう決めたか？」

「え・・？」

「え？じゃねえだろ？が。“恋人”的話だよ。」

「！あ、ああ・・・。」

泰介は、スチール缶を握り締めて、俯いてしまう。

「・・・どうした？」

「・・・・・どうしたら、いいのかなって。」

「？」

「決まつては、いるんですね。」

「なら……。」

「でもつ……。」

「……泰?」

泰介は、顔に影を落として、
黙り込んでしまった。

暁は軽く溜息をついて、
ぽんぽんと頭を撫でた。

その仕草に、思わず涙した。

「……僕つ……、やつぱり、向いてないんですね。」

「なんで。」

「……落ち零れ、だから……。」

「……。」

“落ち零れ”。

泰介は、そのことを酷く気にしていた。
暁も、それを知っていたから……。
だから、優しく抱き寄せて、頭を撫でてやった。
まるで、泣き出した弟を慰めるように。

「お前は落ち零れなんかじゃない。」

「……。」

「多分な。」

「なつ！ 酷いじゃですか！ それってフォローになつてない！」

そうじつて噛み付いてきた

泰介に、暁は満足そうに微笑んだ。

微笑んだ

それを見て、泰介もはつとして、そのあと数秒、微笑んだ。

カラント、

第三十一章 がんの落ちる處

「おまえがおもてなしをめざした。」

二
一
七
」

「！本石先生！何か御用ですか？」

息を切らしてかけてきたのは、
泰介と同期の本石春哉だ。

「はあ・・何か御用ですか、じゃあないですって。

このあと、大事な集会があるので、朝会のときに言わねたでしよう。」

「・・・ああ、やつこえば。」

一春は相変わらずきあきらしてんなあ。」

「暁先生が大怒把過ぎるんですよ!とにかく急ぎましょう!」

そういうわれ、本石の後についていた。
行く場所まつがつて一。

しかし、これから何が起るのかは、誰もわからない。

場所は、職員室。

扉を開けると、中には数人の見知った教師と、理事長以外に他がない。

「？あれ、あの・・・？」

「遅い。12分遅刻だ。」

「す、すみません、豊口先生。うつかり、忘れていたもので・・・」

泰介が申し訳なさそうにお辞儀すると、

佐々基は微笑みながら

「いいですよ。」

と言つ。

その笑顔にほつとして、

泰介は暁とともに他の教師に習つて
一列に並んだ。

並んだ横は、本石の横。

理事は、口を開く。

「では、今から皆さんは、“恋人”候補を上げていただきます。
「一。」

泰介は、とうとう来た！

といわんばかりの顔で、理事長を見た。

理事は、それに優しく微笑み返して、

話を続ける。

「『存知の通り、“恋人”とは、契約した生徒が卒業するまで、
あるいは卒業した後も主従関係を続ける、特別な存在です。」

それを得る権利があるのは、もちろん選りすぐりられたあなた方の
ような

教師だけです。」

厳かな雰囲気で言われ、

教師8人はゴクリと息を飲む。

それを見て、理事は微笑むと、言った。

「まあ、気難しく考える必要はありません。

“恋人”たちは、あなた方に忠実に従います。

魔術を磨くのもいいでしょう、武術を磨くのもいいでしょう。
恋愛感情を芽生えさせるのだって、一切構いません。」

理事が言つと、

鈴鹿がコホン、と一つせきをする。

その顔は、やや紅潮しているようだが・・・。

「ただ、一つ言つておきたいのは、

彼女達を道具として側においてほしくないといつことです。

「道具、ですか？」

泰介が聞くと、

理事は黙つて頷く。

「彼女達は身体も心も持つてゐる、人間です。

更に言うならば、年頃の女の子です。

その子たちを、ただの道具や平氣として、
扱わないで下さい。」

「心得ております。」

理事が言い終わると、揃つて
そういった。

理事は嬉しそうに微笑むと、
本題に入った。

「さて、では・・皆さん、『恋人』の候補はいらっしゃいます?」

そう聞かれると、

皆一斉に罰の悪そうな顔をした。
理事は苦笑混じりに聞く。

「ひょっとして、いないのですか?」

その問いに、

時谷は口を開く。

「は、はあ・・・。
「あらあら・・・仕方ないです。・・そうですね、
この時期でしたら、オリエンテーションがありますから、
それで見定めてみていかがですか?」
「オリエンテーション・・ですか。」

鈴鹿が言うと、

理事は微笑んで、ある紙を渡す。

それは、今回のオリエンテーションの内容だった。

「今回は、在校生の選抜生徒に、
一週間かけて『戦闘』という形でオリエンテーションしてもらいます。
『戦闘』・・・ですか。」

豊口は、少し苦い顔をしたが、
すぐに向き直った。

「わかりました。私は、それで。
「あ、じゃあ僕も・・・」

それに続いて、墨沢も、他の教員も、
満場一致で合意した。

「わかりました。では、オリエンテーションは今週の水曜日
から始めますので。いいですか？」

「ええ。」

合意を得た上で

彼らの“恋人”探しは始まる。

アリ

選ばれし戦士達。

我々の

愛の戦士となつたのか？

第1章 わくわく！？オリエンテーション 開催！

君たちは羽ばたく

大空へ、天高く

君たちは駆けて行く

大地へ、颯爽と

今開かれしその扉を

君たちの若い力で解き放て

パン、パーン！！

景気良く空へ散つて行つた
無色の花火たち。

それは、この学校で開かれる
オリエンテーション開催の合図だった。

泰介は、初めて見る生徒同士の
“戦闘”を、少し緊張した面持ちで
待ち構えていた。

これから行われる大会で、

自分の“恋人”を

見つけ出さなければならないのだ。

「はあ・・・。」

軽く溜息をつくと、
泰介は席に着いた。

教員専用の、観戦用の席だ。

「もうすぐですね。」

「…セ、佐々基先生。」

急に横から声をかけられて、
はっと我に返る。
声の主は、佐々基だつた。
相変わらず、優しく微笑んでいる。

「あの・・佐々基先生。」

「何でしょ、う？」

「・・先生、は・・も、う、決まつてるんですか？」

「“恋人”、の、ことですか？」

「・・はい。」

泰介は、相変わらず俯いている。
その横で、佐々基はふむ、と
一度考えてから、また微笑んでいった。

「まだ、ですよ。」
「本ですか・・・？」
「ええ。まだです。・・私も、
このオリエンテーションで決めよつと思つてこますし・・。
「・・そう、ですか。」

泰介はそれを聞いて、

一瞬安堵したような、そんな表情を浮かべた。

それに佐々基はより優しい笑みを浮かべて、頭を撫でてやつた。

「墨沢先生は、謙虚な方ですね。」

「ええ！？そ、そんな事は・・・。」

「貴方に選ばれた生徒は、きっと幸せになれますよ。」

そういった顔は、何処か寂しそうで・・・。

「佐々基・・・先生・・・？」

「はい？」

呼びかけると、

何事も無かつたかのようにな

再び笑顔で返す佐々基。

泰介は、あ、いえ・・・と

言って、視線を競技場へと戻した。

中央のグラウンドでは、生徒達が整備をしている。

もうすぐ、始まるのだ・・・。

「それでは只今より、第76回、魔導学校オリエンテーション、大戦闘大会を行います！」

歓声と、緊張の声が沸き起る。

教員も、生徒も、皆、興奮している。

「それではまず、理事長からのお言葉です。」

「おはようございます。皆さん。

今日から7日間に渡つて開催される、この戦闘ですが・・・あくまでも新入生へのデモンストレーションであり、本気の勝負を望んでの

ことではありません。

よろしいですか？ぐれぐれも無理をしなよつて、心がけて下さー。」

そのあと、注意事項と勝敗が発表された。

「まず、勝敗です。

相手が負けを認めるか、武器が場外に飛ばされた時点で負けとなります。

また、相手に重傷を負わせた場合、または死に至らしめた場合、その選手は

失格及び退学処分になります。

これは、あくまでデモンストレーションです。死傷者を出さないようにして下さい。

注意事項として、

観客の皆様は、飛び火に注意して下さい。

選手の皆さんは、自分が危険だと思ったらすぐに負けを認めて下さい。

何度も言つようですが、これはデモンストレーションです。よろしいですか？」

司会者の言葉が終わると、選手宣誓が行われる。これは、三年生の仕事だ。

「宣誓！—我々は、堅実なるスポーツマンシップにのっとり、正々堂々と勝負することを誓います！—！」

それが合図となつて、

この大戦闘大会は幕を開けたのだった。

最初は、2年生の試合が行われた。

「では両者、前へ！」

遠くで、審判員の声が聞こえる。

「・・あれ？」

「？どうしたんです、鈴鹿先生。」

「いえ・・あの、“生徒会”がいないなと思つて。」

「え？」

ふと、生徒会席を見ると、確かに。

そこに、生徒会長たちの姿は無かつた。

「理事、これはいつたい・・。」

「彼女達は別のところにいますよ。」

大丈夫、きちんと勝敗を見極めてくれますから。」

そういうと、理事は視線を

戦う乙女達へと注いだ。

決戦は、白熱をきいていた。

「“水銀”！—！」

「“守々”！—！」

響き渡る呪文と、

歓声。

泰介始一同は、彼女達を
真剣に見極めていた。

「・・・54番・・・・。

「・・・墨沢先生。」

「はい？」

後から声をかけられて、
振り返る。

そこには、豊口がつまらなそうな
顔をして立っていた。

「あの、何でしょ?」

「無理に、決めなくともいいですよ。」

「え・・・・。」

一瞬、何のことだか、さっぱりだつたが、
もしかして暁があのときのことを
うつかりしゃべったのではと思つて、
うろたえた。

「あ・・え、と・・・・・。」

「・・決まつた人が、いるんでしょ?」

「な、なん・・・」

「ま、勘ですから。気にせず観戦して下さい。」

「え・・、ちょ・・・!」

そのまま、豊口は背を向けた。

その背に、泰介は叫ぶ。

「豊口先生は・・！」

「俺は、もう決めますから。
・・探してきますよ。」

「あ、探すつて・・・ちよ・・・・！」

泰介の声も聞かずに、

豊口はその場を後にした。

「・・豊口、先生・・？」

「放つておいたらどうですか。」

「佐々基先生・・。」

「彼にはあまり、深く関わっちゃいけませんよ。」

「・・・え・・？」

「どうこうことですか。」

そう聞こうと思つたが、止めた。

佐々基の顔は、何処か重く、

沈んだ表情を貼り付けていたからだ。

一際高い、歎声が上がった。

「おっとおー？これは審議かあー？」

司会を務める、実況席の
放送部生徒が声を上げた。
それに、一同も注目する。

「・・・え、あ、はい・・ええ。」

審判は、誰かと連絡を取ると、視線を戻していった。

「この勝負、ドローです！」

「何故ですか！？」

「どうして、まだ、まだ決着はつつ・・・！」

「この試合、力の差は互角。これ以上やりあつても意味はないとのことです。」

「そんな・・・」

まだ納得が出来ないのか、一人の少女が食い下がる。

「納得できません！」

「“生徒会”からの指示です。」

そういつた瞬間に、周りの空気は一気に張り詰め、場内は静まった。

「・・・わ、わかりました。」

それまで食い下がっていた少女も、納得をして、

そのまま一人は席へと戻った。

泰介は、息を呑んだ。

「・・・せ、生徒会って、そんなにすごいんですか・・・？」

「ええ、まあ・・・でも、会ったことはないんだけど・・・」

「え・・・」

柳真のその一言に、泰介は驚いた。

「・・そ、そういうえば、僕も会ったことないんですけど・・。

柳真先生も、なんですか？」

「私だけじゃない。他の教員は皆そだだりうな。

生徒会は、出来るだけ目立たないように活動しているから。

「な、なんで・・。」

「見つかったら、争奪戦が始まるからさ。」

真後ろから聞こえた声は、

豊口のそれだつた。

泰介は、振り返る。

「あれ、さつき、誰かを探しに行つたんじゃ・・。

「見つからなかつたんでしょう？ 当たり前ですよ。

“条件”が“蒼のポニー テール”じゃあ・・。」

佐々基は、皮肉れた声で言つ。

泰介は、この一人は仲が悪いんだろうか、
と思って、こいつと暁に聞いてみた。

「・・まあ、昔こりいろ合つてな。」

「？」

「あの、豊口先生・・。」

「なんですか、時谷先生。」

「その、 “争奪戦”・・・つて・・・？」

恐る恐る聞いてみる。

それを知っているのは、昔から
そこにいる教師のみ。

誰もが、口を開ざしていた。

「・・・今から、むづ十年へりこ前のひとなつてしまつさどすかべ。
・。」

口を開いたのは、
みんなの父親役である、
初老の滝藤であった。

「・・・それでも、聞きますか？」

その穏やかな声に似合わず、
どこか口調は、厳しいものだった。

「お願ひします。」

何故だか解らないが、
泰介はそう答えた。

そう、答えたことに、
自分で驚いた。

「・・・やうですか。」

そう、一呼吸おいて、

滝藤はゆつゝじと十年前の話を
し始めた。

それは、遠い過去の記憶。

埃まみれの記憶の倉庫で

頑丈に鍵をかけ

封印された

忌まわしい伝説という名の惨事。

遠い記憶の彼方から

誰かが私を呼んでいた。

「・・・滝藤先生は、お喋りだなあ・・・。」

知つておいたほうが、いいのかもしないから。

滝等の耳に、

澄んだ声が聞こえた。

その声の主を、

滝等は知っていたし、
きっとその横の臣にも
聞こえていたはず。

それでも臣は

黙つて滝藤のしたいままに

させていた。

それが、理由だった。

その声は天への祈り

その願いは貴方の為

それでもそれは風に散つた

紅い紅い夕日に染まつた

乙女達の群像よ・・・

まだ、あの人気が理事になつていない頃の話だ。

その時の魔導学校は、今よりも規制が緩く、戦闘においても、人が死のうが傷つこうが、そんな事全く問題にならないような状態だった。

とはいっても、校内は荒れているわけではなく、いたつて清潔感溢れる空間が漂つていた。

皆、戦闘時以外は普通の生徒だ。

しかし、その当時は学校同士でのございざが絶えず、そうとうな戦闘があつた。

そこで、多くの生徒達が死んだ。

強さが全てだつた。

“妖精”は貴重視され、

“天使”が軍団長を務め、

“兄妹”は、捨て駒同然の扱いをされた。
妖精に關しては、室内にかくまわれ、
指示を出すだけであつた。

そんな中、進級してきた生徒達の中に、
恐ろしいほどの力を持つた生徒達がいた。
彼女達は、“転生”をくり返し、

この汚れた世をただしたいと言つていていた。

そこに目をつけたのは、
ろくでもない教員達である。

あわよくば彼女達を、
自分達のものにして、契約しようと、
競つて争い始めたのだった。

彼女達は落胆した。

・・・ここなら、一緒に戦ってくれる救世主がいると思ったの？」

泣きながら、彼女達は姿をくらませた。

その後は、もうめちゃくちゃだった。

一時、この魔導学校は潰れかけたといつ。

「そんなときに現れたのが、今の理事長なんですよ。」

滝藤の話すテンポは淡々として変わらず、それがむしろ、恐ろしかった。

一同は、しんとして誰も口を開かなかつた。

そこへ、臣が口を開いた。

「そうして・・今の生徒会が出来た。理由は簡単。“恋人”としてきちんと愛してくれる人を探す為。兵器ではなく、人間として扱ってくれる人を。それまで、かくまつ・・・というのを、あの理事は生徒会という形をとつて確立させたの。」

その穏やかな声は、どこか、しなやかだった。

臣の耳には、彼女達の声しか聞こえない。

駄目だよ、臣ちゃん。そんなあつさりしゃべっちゃあ・・・別に・・かくまわれなくても良かつたんだけど・・・

「・・駄目よ、そんなの。」

「え? 何か、いいました?」

「・・いえ?」

臣は鈴鹿の問いを、あっさりとスルー。

そのまま、戦闘を見やつた。

今日の試合は、これで終わった。
それは、物悲しい、始まりだった。

試合が経過して、6日目。

「さあ、怪我人もなく、いよいよ明日がラストとなつましたね！」

司会者の声も、半ばかすれているが、
しかし興奮は未だ覚めやまなかつた。

「流石に、6日にもなると・・・。」

「理事も無茶なことするなあ・・・。」

「生徒数が多いですからね、仕方ありませんよ。」

泰介、時谷、本石は、

眠い目を擦りながら

観戦を続けていた。

事件は、このあとすぐに起つる。

カアー・ンツ・・・・・・!

何か、鐘の音のような音が響いて、戦闘をしていた二人の少女が、急に動きを停止した。

それを見て、観客含め一同は騒然とし、何事かと凝視する。

すると、その一方の少女が、奇声を上げた。

それは、女の子の可愛らしい声ではなく、野太い男のような声だった。

それを合図にしたように、対していた生徒も同じような奇声を上げた。

そうして、見る間に一人の身体はおぞましい怪魔へと変貌していった。

制服が裂けて、青紫色のぬるりとした皮膚が、異常な形となつて現れた。

生徒や観客は悲鳴を上げ、

教職員は主任の指示に従つて戦闘の準備に入った。

むろん、泰介達も、だ。

「理事、僕らも行きます！」

「お願いします。恐らく・・・レベルは「怪魔レベル8でしちうね。」

「し、臣先生・・・」

「相当苦戦しますけど・・・大丈夫？私も出ましょうか。」

「え、臣先生つて、属性何でしたつけ……」「臣先生、あなたはここにいて下さい。」

理事の鋭い声は、

悲鳴の響く中でどこか優雅だった。

「・・御意。」

「他の方は、出来るだけ被害が出ないよう」「一元づ

「御意！！」

一斉に声を上げると、
すでに化け物化したそれめがけて
突進した。

その横に、一人の男性教師が
泣いていた。

「！松田先生、何してるんです！あなたも・・・。」

「市川・・。」

「！・・・まさか、松田先生の・・？」

「俺の、“兄妹”だつた。・・一生懸命で、
あんなに真面目だった子が・・なんで・・・なんでだ・・・！？」

泣き崩れる彼を、
暁が影へと誘導した。

「いいか、ここから動くな！

戦闘に出ないのならば、逃げろよ！？」

「・・・。」

松田は、黙つて頷いた。

「おっし、泰！行くぞ！」
「は、はい……！」

暁の声をきっかけに、

一斉に額の“宝玉”を狙つた。
それは魔族の急所であり生命源だ。

「悪いな、もとは生徒といえど……

今はこの世を邪に染める悪鬼！手加減は出来ん！」

豊口が叫ぶと、

怪魔が振り向いた。

真紅の瞳に、

「市川」という生徒の
名残はない。

額にクリティカルヒットした

豊口の剣は、青々と光を放つていた。

同時に背後では、柳真の槍に似た

武器が、額のそれをかち割ろうとしている。

カン！

「ちひ・・・そう簡単には、割させてくれないって・・・？」

一人ご ciòると、後ずさる。

「・・・なかなか、8ともなると・・・」

泰介の息が上がっていた。

あれから30分。

敵味方共に、疲れているはずだった。

「なんとかしなければ……。」

「……。市川あ……。」

その声は、急に後ろから聞こえた。
それは、無感動な声。

「ま、松田先生……!？」

「……なあ、市川あ……お前、なんで「んなんになつちやつたんだ
よ?」

川口も、なんでだよ……。どうしてちやつたんだよお、お前等……。

「松田先生! 危険ですから、どこでぐだむ……!？」

鈴鹿が声を失つたのは、

別に松田が泣いていたからじゃない。

彼の顔には、笑みが浮かんでいた。

「なんだ……。なんだそんな、立派な怪魔になつちやつ
たわけ?」

そういうと、

高々と笑い出した。

それは、狂氣染みていた。

「まつ……」

「なあ、そういういませんか、皆さんも……。

ついに、ついに俺の実験が成功したんですよ……!」

その笑い声は、耳を劈いた。

「ちつ、前々からおかしな奴だとは思つていたが……。」

豊口が舌打ちすると、
松田は振り返る。

「おかしいだなんて。失礼ですよ？ 豊口先生。
口を謹んで下さいよ。僕はこれから、人間から怪魔を生んだ
世界初の人間として、博士号を貰い、名誉を手に入れるんですから
！――！」

そういうと、彼は一方の怪魔に飛び移つて、
再び続けた。

「この世界は腐つてゐる。
だから、僕が正すんですよ。」「
なんてことを！――！」

「人間なんてクズだ。僕は、魔族を誇りに思つ！――！」

そういづや、

怪魔に指示を出した。

怪魔は、今までにない動きをして、
よりいっそうの苦戦を強いられた。

「あはははは！――！お前等みたいなクズじゃ、
僕の素晴らしい結晶を打ち崩すなんて出来やしないよ！――！」
「松田先生！止めて下さ！――！こんなことをしても世の中は・・ぐつ・
・！」

「泰！」

暁の声が響く。

痛恨の一撃が、泰介の腹部をかすつた。

鮮血が、ドロリと流れる。

「泰！大丈夫か！？」

「つ、大丈夫です・・・！」

「鈍いなあ・・・墨沢先生・・・やっぱり“落ち零れ”だからですか？？」

ニヤニヤ笑うその顔に、

泰介は愕然とした。

なんで、あの人気が知ってるんだ。
なんで・・・

泣きたかつた。

だが、今泣くわけには行かない。

今泣いたら、それこそ負けだ・・・！

「僕は、あなたを許さない！－自分の生徒を、ただの兵器か実験の道具としか見ないあなたを！」

「それの何が悪い！“妖精”や“天使”ならともかく、見習いの役立たずな“兄妹”なんぞ、実験の道具か使い捨て兵器にしかならんだろうが！－－－！」

その言葉に、一同は激怒した。

それでは、先ほどの話と同じじゃないか・・・。

「今の言葉を撤回しろ！許さんぞ……！」

柳真の怒声が響く。

普段温厚なあの柳真が、

いつになく感情を露にしている。

「“兄妹”が使えない・・・！？貴様・・・！
ふざけるな！恥を知れ！……！」

その怒声が、正式戦闘開始の合図となつた。

「・・・いくら抗つても、クズはクズだ。
・・・やれ。」

物悲しい昔話を

また再現することを

彼らは望まない。

「・・・理事。」

臣の瞳は、怒りに満ちていた。

理事も、同様だつたるづ。

滝藤は、ただ黙つて目を瞑つていた。

「・・・わかりました。」

その声を聞いて、
臣は連絡を取った。

「待つてたよ、田中さん。」

その、連絡をね。

弾むよ、うな

歌うよ、うな

しかしその断片には

怒りが満ち溢れていた。

彼女達の

出番だ。

第3章 めりめり参上！正義の戦士は愛の女神！？

高らかに

跨らしげに

それは凜として美しく

儂げに

朧氣に

それは涼として麗しく

爆音と奇声の響く場内は、
鉄と硝煙の匂いに満ちていた。

「ちいり、随分時間が経った・・・
このままじゃ、いつちのが先に・・・。」

「諦めるな！」ここで我々が諦めたら、
住民全てに被害が及ぶんだぞ！！」

暁の声に、佐々基が返す。

それは、自分への戒めでも
あつた。

「（そうだ・・・）で諦めてしまえば・・・

皆、死んでしまつんだ……（）

何か得体の知れない

恐怖は、そのまま誰かを・・
否、自分を飲み込んでしまいそつで。

「佐々基…」

「あ…・・・…！」

考え込んでいた自分がうかつ。

目の前の鋭い爪は、自分でも受けきれない
スピードで迫つてくる。

無論、ゼロスタートも切れない仲間だつて・・

「さ、佐々基先生　…！」

「つ・・・。」

「ここで、ここで死んだら・・

俺の使命は・・・・・どうなるんだ？

視界いっぱいに、それが迫つた来た。

「“駿瞬”！」

口リータ調の可愛らしい
甲高い声が、守備呪文を唱えると、
佐々基の目の前に一枚の
薄いプラスチック板のよつな
ものが現れた。

ギシ！

鈍い音がして、
その爪は薄い膜によつて
食い止められた。

「「」、れは・・。
「だあいじょうぶですかあ？」

甘つたるこよみうな声が響いて、
佐々基含む一同は、声の聞こえた
方へと視線を向ける。

そこには、見知らぬ少女たちがいた。

今まで、出会いしたことのない。
しかし、「」の学校の制服と

同じ形の服を着ていいことから、恐らくはこの学校の生徒で、そしてそれぞれにいろいろなカラーがあることも含めて、彼女達は・・・・・

「君、達が・・・生徒会、なのか？」

その声に、桃色の髪をした小柄な少女が答えた。

「そうだよつ」

その声は、先ほど呪文を唱えた、あの声だった。
彼らが啞然としていると、眼鏡をかけた、無愛想な少女が、声を上げた。

「ぼやつとすると・・・死にますけど。」

「え？ あつ・・・！」

間一髪、本石はそのへどろのよつなベトベトした液体をかわす。
それは、地面にこびりつくと、異様な音を立てて解けて消えた。

そこに、大きな穴が開いた。

「つ、や、ばいだろ・・・あれは。」

本石が冷や汗をかいていると、

その真横に、先ほどの少女が降り立つ。
端正な顔立ちが、美しく、凛々しい。

「加勢しましょう。」

「え？ あ、た、助かる・・・。」

そういうつて、少女は怪魔の前に立つと、
一呼吸おいた。

そして、息を吸い込むと、言靈を紡ぐ。

「“汝ら、今闇より蘇りし悪しき心、
その心、わが誠心で打ち碎いて候。
汝ら、闇へと再び帰せよ・・・。”
「え、永唱呪文つ・・・！」

それは呆気なくて、
簡単に片付いた。

「・・・う、嘘・・・だ・・・俺の・・・俺のつ・・・
大・・・傑作、が・・・」

「それは傑作とは呼べない！」

遠く澄んだその声は、
活気に満ち溢れている。

どこから来たのか・・・

緑色の制服の少女は、
エメラルド色の短い髪を靡かせて、
そこに降り立つ。

凛々しい顔立ちは、活発なイメージを与える。

その少女の顔は少し怒っていて、ツカツカと歩み寄ってくる。

「あなたは、重罪を犯したんだ。それを、許せるような・・“我々”じゃない。」

卷之三

「・・・处罚は、わかってるね?」

深緑の少女がそういうと、
桜色のロリータ少女も、
藍色のめがね少女も、
ならつて姿勢を正す。

「…………そんなの、うけねえよ。」

「つ！」

松田は立ち上がり、自らの腕に何やら注入している。

見る間に、松田は怪魔へと
変貌を遂げた。

そへは、懲りへもあらず、無錢だつたら

「ハアー・・・ア、アア・・・グルアアアア！」

「遂に、血までも……も、予想したことだけね……」

深緑の少女は溜息をつくと、

背後の一人へ指示を出す。

「行くよ、とりあえず抑え……」

言つ前に、頭上からドロリとした
液体が振つてくる。

「うつわ、なん……？き、氣色悪い……！」

「氣をつけて下さ……あれ、当たつたら溶けますからね……」

「嘘お！？」

時谷が言つと、

今度は眼鏡の少女が抜刀。

「ちつ……」

「つぎやあああああ！いが、いが……つ！いがああああ……！」

「痛いかつ！これが彼女たちの痛みだ！わかるか！？」

背後では、

深緑少女が泰介に治療を施す。

「大丈夫ですか。」

「あ、う、うん。ありがとう……」

「いーえ。うわー、いたそーだなあ。」

治癒能力は、恐るべきものだった。

「す、すごい・・・。」

「そつちー！大丈夫ー！？」

「へーきい／＼」

ロリータ少女はぴょん／＼と
跳ねると、札らしきものを出して、
松田だつたそれの周りを
囲う。

「うがああああああ！？」

「貴方は許せない。ごめんなさい。」

それは、一瞬で、刹那。

溶けてなくなつたのは、松田のほうだった。

残つたのは、やせ細り、
弱弱しく衰弱しきつた、
松田。

最早、長くないだろう。

「・・・あ、・・・ああ・・・な、なぜ・・・だ・・・」

「それは、貴方の心が、小さかつたからだよ。」

「・・・俺、の、こころ・・・？」

「弱き想いに、勝てないものはないんだ。」

「・・・・俺・・・は・・・。」

そういうて、松田は息絶えた。

人間を怪魔へと変貌させる研究を続けた

男の一生は、呆氣なく幕を下ろしたのであつた。

「さあ、さあ」

エメラルドの少女は、
先ほどどうつて変わつて
可愛らしき笑みを浮かべてゐる。

瀬理、詩羅、撤收しよ、」

わが
た
」

「汰リ。アリ。」

「あ・・・。」

一
じや
帰るよ

少女が、

瀬理と

「詩羅」を引き連れて去つていこうとする。

「ま、待つてくれ！！」

泰介の声に反応したのは、エメラルドの少女。

「何ですか？」

その視線は、柔らかく、
しかし無感動だった。

「・・行つて、しまつのか・・？」

「せうですよ。我々の役目は終えました。

「これ以上ここにどじまる理由はないし、どじまれない。」

「どうし・・」

「長話が過ぎましたね。じや。」

「あ、ちよつ・・！――」

言つ前に、大きな風は彼女達を
呆氣もなくさらつていった。

泰介も、本石も、皆睡然として

その風を見送つた。

佐々基と豊口だけは、その方角を
睨んでいた。

「・・行つちやいました・・ね・・・・。」

「や・・だな・・・。」

本当に一瞬の出来事で、

まだ、状況把握が上手くできていなかつた。

一陣の風は、無事、彼女達を送り届けた。

「ただいま。」

「お帰り。遅かつたね。」

「うん、ちよつとお話してた。」

「そうか。」

漆黒の髪を揺らして、

黒衣の制服を着た少女は、

特に責めるでも問うでもなく、
深緑の少女に言った。

その横で、純白のポニーテールの
少女は、窓の外を睨む。

「あれ？ 怒ってる？」

「怒つてたら怒鳴つてるわよ。」

「あははゝそつかそつかゝ」

「・・・どうしたの？ 濑理・・・」

「ん？ ん～・・・もうちょっと、あそこによいたかったなあつて。」

瀬理と呼ばれた桜色の

少女は、少し残念そうに

高級そうなソファに寄りかかった。

その瀬理に問うたのは、

濃紫の眼鏡の少女。

「そつか。もう少し、いたかった・・か。」

「うん。なんかね、多分・・いい人たちだよ。」

「・・・そう。」

「瀬理の田利きは、信用できるからね・・・。」

黒衣の少女と、純白の少女は
言った。

それは、物語を紡ぐような
同じテンポで・・。

「ね、律斗君。」

「あのさ、君ていわな」

「もうそろそろさ、いいんじゃない？」

深緑の少女から出した言葉に、律斗といわれた黒衣の少女は同じく漆黒の髪を揺らして顔を傾ける。

「……うん……。」

「ねえ、律斗君。」

「……。」

「……ねえ、律斗さん。」

「……。」

名前を呼ばれ振り返ると、そこには夕澄の制服を来た少女が立っていた。

「私、思うの。いくら運命を見っていても、何も変わらないんじやないかしら?」

「……わかつてゐるさ、でも……。」

「逃げてばかりじや何も始まらないのよ。」

「……三月……。」

窓の外を見ていた純白の少女は不意にわって入ってきた。

そして、話を続ける。

「棹螺の言つとおりだと思つわ。私は、ね……。」

「……。」

「右に同じく～～～」

美しくは持つた声は、

真紅の制服をまとつた双子。

その声は、やつと律斗と呼ばれた少女の耳に、心に届いたようだ・。

「じゃあそろそろ・・・例の計画を、実行しますか。」

「…ありがとう…律斗君…！」

空の月は、ぽつかりと穴を開ける。

ルルル・・・

『はい。』

「あ、もしもし。臣ちやん?」

『何、決めたの?』

「そ、良くわかつたねえ。」

『深夜の電話なんて、そんなもんでしょう?』

律斗はクスクス笑うと、
臣も習つて笑つた。

『明日…』

「そ、明日。大丈夫かな?」

『問題はないと思つけど…。』

「そう。ありがと。」

『理事には?』

『臣ちやん伝えておいてよ。』

「私が…?」

不満そうな声を洩らす臣こ、
律斗はまた笑つて言つ。

「一番近いでしょ。」

「そりゃあ家には近所さんたれ」と…」「そういう意味じゃなくてさ。」

・ え 。

「まあいいや。受話器越しに聞こえてるかもしれないからね。」

律斗はそういうと、

携帯の通話状態を解除した。

ツー・・という無機質な音しか聞こえなくなつた。

じぱりくその音を聞いて、
田は受話器を置いた。

「・・なんでもお見通し、とこつ奴ですか？」「全く、あの子に隠し事は出来ませんよ。」

臣は髪をタオルで拭きながら、ベッドに座り込む人物に

溜息を洩らす。

彼の髪もまた、濡れていた。

溜息をついた。

「・・・いいんですか。」

「いいんじゃないですか？彼女達がいいといつなのならよ。」

「・・・そう。」

臣は彼に笑いかけ、
彼もまた、臣に笑いかけた。

深夜の星は、
瞑々に光る。

「まつたく、理事もまだまだ・・・若いねえ・・・。」

律斗は軽く溜息をついた。

その横では、三月や瀬理たちが
寝息を立てている。

この寝顔を

この平和を・・・できれば、壊したくはない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1174f/>

らぶらぶ！魔導学校へようこそっ！？

2010年11月14日09時28分発行